

「PRAMĀṆAVĀRTTIKA. IV」解釈の問題

—超越論的遂行論の視座—

谷 貞 志

PV. IV のライトモチーフは“リアリーゼーションをもつ推論 *Vastubalapravṛt-tānumāna* (实在機能に連動する推論)”にある。これは「他者に対する論証」という間主観的レベルにおいてディグナーガの体系の限界が誘発するパラドックスとアンチノミーを克服する過程で主題化した。本稿は、この推論の作動する「場」を「構造存在論」としてとらえ、PV が間主観的レベルの超越論的同定規定として導入した“*Svabhāvapratibandha*”が「解釈学的総合」であること、および、その超越論的演繹論が「瞬間的存在性」論証であることを明らかにしたい。以下 PV. IV の全域を射程に入れ、その核心的問題を現代哲学の主要動向、K. O. Apel の *Transzendente Pragmatik* と H. Rombach の *Strukturontologie* の視座とに連動させて考察する。

1. [vv. 1-14. ad. PS 1ab] 立論者および対論者は各々が所属する思想体系 (*Āgama*) A, B から独立の証明根拠 H によって相互にコミュニケーションを遂行しなければならない。A, B は各々固有な存在論を基底構造として意味論レベル (*Semantik*, 言語形式と指示対象の連関を考察する) で整合性をもっていると仮定しよう。構文論レベル (*Syntax*, 言語形式のみを対象とする) の形式論理による整合性はその上空をスライドするにすぎないのであって、後者によって前者の固有な存在論の妥当性を証明することはできない。A に従属する立論者が B 内の因子 (*dharmā*) を証明根拠 H とするとき、すでに A のコードに H を変換して解釈してしまっている。仮りに B のコードで解釈された H を導入できた場合、それによって A の整合性が破られてしまうか、あるいは間主観的レベルで矛盾が発生することによって B の整合性をこのレベルで破壊する *prasaṅga* は、それによって A が間主観的レベルで整合性をもつことを帰結しない。基底に固有な存在論を前提とする思想体系間のコミュニケーションは全く遂行されていないのである。推論はただか煙から火を論証するトリヴィアルな日常言語ゲームに還元されるか、あるいは構文論的整合性のヴェールをかけたイデオロギーの

自己主張に終る。相対的な各思想体系の存在論の地平（Horizont）を融合させ、同時に間主観的レベルで整合性をもつような「場 Vastu」に向って推論を作動させなければならない。自己 A と他者 B とが超越的に「まず、自明のものとしてあって」、それからコミュニケーションが始まるのではない。基底に超越論的コミュニケーションが先行しているのである。この構造を見極めることが遂行論レベル（Pragmatik）の考察である。コミュニケーションされるのは意味論レベルの言語ではない。そうではなくて遂行論レベルの基底構造としての「対象 artha」なのだ。言語は否定的媒体にすぎない。この「対象」は言語構造や主観的構想力によるイデアルな構造表象を外的に（客観の方向に）写像したものの Āropita ではない。この外的写像体を固定し、主観がそれを再び反映するというような意味論レベルの整合性しかもたないシステムは實在 Vastu に全く連動しない。基底構造は「対象が対象に連動する」のであって、ここでは「主観—客観」図式は外されている。これは「構造存在論」としてとらえるべきである。推論をこの基底構造に連動させるためには遂行論レベルで言語構造に基づく構造表象に対して超越論的反省を加えなければならない。

2-1. [vv. 15-47. ad. PS 1cd, 2ab] 推論を何に向って作動させるか、という注視性（vyapekṣatva）が場 X を〈dharmin, dharma〉として構造化する。（この式に「局所場（ダルミン）X に Y-ness という因子（ダルマ）が存在する」という解釈を与える。）証明根拠 H を h, 証明されるべき因子を S とすれば、構造〈x, S〉は〈x, h〉と S, h 間の Svabhāva（超越論的同定）から導出された Vyāpti「h→S」の構造によって決定されるのであって、恣意的な主張命題（言明）〈x', S'〉から逆に理由命題〈x', h'〉を選択し、「h'→S'」を構文論・意味論レベルの形式的必然性によって基礎づけたとしても、實在の構造連関に連動しない。ここには次のような問題がある。一般に〈x, h〉の x と〈X, 〈x, h〉〉の X は同じく Pakṣa とよばれる。〈dharmin, dharma〉構造として同型だからである。X は〈x, h〉をそこに向って作動させ、同時にそれを媒介にして構造〈x, S〉を現出させる場として前提されているのではないのか。X は立論者と対論者が地平を融合させる解釈学的先行了解の場であるから、ここに解釈学的循環の問題がある。PV は後述するように X の深層構造〈x, h〉の構造分析によって問題の核心に迫る。

2-2. [vv. 48-90] 推論（Vastubalapravṛttānumāna）の作動領域（gocara）は Pratyakṣa（svalakṣaṇa そのものではない、後述）と Parokṣa である。超越的第三領域 atyantaparokṣa は推論可能範囲から外される。したがって注視されつつある

単一のダルミン X に関して H_1, H_2, \dots が「対立・矛盾しつつ X に的中性（整合性）をもっていること。Viruddhaikāntika（—avyabhicārin）」は排除される。この規定は「Svabhāva」における h, S の同定を背面から表現したものである。

2-3. [vv. 91-163, ad. PS. 2b₂-d] 解釈学的の先了解としての $\langle x, S \rangle$ の本質規定と限定要素は $\langle x, h \rangle$ のみによって制御されなければ推論の独立性は与えられない。PV はディグナーガの外的ファクターによるパラドックスの制御のすべてを Svabhāvaprati-bandha を基底構造とする H へ繰り込み、実質的には Hetu-ābhāsa へ還元する。自己の所属する思想体系と自己自身の言明の無矛盾性による制御の例「Pramāṇa は prameya を対象としない」（or. 「私は嘘をついている」など）を言明自身の認容 Kāryahetu (tatutpatti) によって排除し、日常言語の約定に反する例「月」は「兎をもつもの」ではないを Svabhāvahetu (tādātmya) によって排除する。これらの実例は pakṣa x が Vyāpti を帰納する対象領域から外されている PS の体系内で証明可能であり、反定立は Kevalavyatirekī になり証明されない、というパラドックスを誘発する。PV は Apoha-vāda を導入して克服する。「月」がポジティブに月を指示し、第二の月がないから不共不定 asādharaṇa になるのではない。「月」、「兎をもつもの」は記号にすぎず、あらゆる対象の上をスライドする。記号 A, B は \bar{A}, \bar{B} を排除するかぎりで一般者のイデアルな論理空間に示差構造を与えているにすぎない。これが実在に連動するためには遂行論レベルで「場 X に対して、それ以外のありかたの排除」という Svabhāva の超越論的同定を必要とする。次に知覚内容による制御の例「音声には聞かれる可能性がない」を PV は Svabhāvahetu へ繰り込む。知覚対象は独自相であるから直接言語を対応させて反定立を構成することはできない。仮りに反定立が与えられてもアンチノミーになる。だが、対象ではなく知覚しつつある認識機能の作動している場には構造化のポテンシャルリティがある。この機能力の総合性を推論の作動対象として間接的に言語の示差構造に連動させることはできる。Svabhāva の基底には知覚の対象現出機能の潜在的構造がある。しかし、その構造化を可能にする総合性の視座は解釈学的の先了解として、すでに Svabhāva の超越論的同定規定によって与えられていなければならない。

2-4. [vv. 164-188. ad. PS. 3-7] Naiyāyika が構成してみせた論式「言語には恒存性がある。（Pakṣa としての言語は）全対象領域から外されているから」、あるいは「言語性があるから」という $\langle A, A\text{-ness} \rangle$ の定式は “twilight-zoon (H. Hattori, B. K. Matilal)” の Pakṣa x を白昼に主題化させた。

3-1. [vv. 189-194. ad. PS. 8.] 遂行論レベルで解釈の地平を構成した示差構造内の“empty symbol (E. Steinkellner)” h , S は x においてネガティブな“世界線”を画いて交差する (ayogavyavaccheda)。実在 $Vastu$ に連動するためには x , S , h の地平融合の場 X_0 が時間構造を含む生動的な知覚の対象現出機能の潜在的構造の場 P_0 に解釈学的先行了解によって連動していなければならない。 X_0 と P_0 との構造連関が解釈学的総合としての $Svabhāva$ である。いいかえれば、この $Svabhāva$ が x , S , h の示差的構造連関を発現させているのだ。したがって「Pakṣadharmatā」は「構造存在論」としてとらえなおされ、後期の Āntarvyāpti (内遍充論。Y. Kajiyama) へ展開する。

3-2. [vv. 206-247. (v12cd を含む)] h と S の超越論的同定から「 $h \rightarrow S$ 」という $Vyāpti$ の構造を導出することは「 $\bar{s} \rightarrow \bar{h}$ 」を x において $dr̥ṣyānupalabdhi$ (知覚可能性をもった対象の否定的確認) によって確認する操作を必要とする。これは後期に $Sādhyaviparyayabādhaka$ $pramāṇa$ として定着した。「 $dr̥ṣya$ 」という限定は「知覚可能性」、「認識条件を充たしていること」を意味するから、認識を可能にする超越論的条件なのである。この条件を外すと知覚の潜在的構造 P_0 が捨象され、 $Kevalavyatirekī$ (純粹否定論式) によって $atyantaparokṣa$ (ex. Ātman など) が「 $\bar{s} \rightarrow \bar{h}$ 」 \rightarrow 「 $h \rightarrow S$ 」という構文論のコントラポジションから導出される。

3-3. [vv. 248-259] $Svabhāva$ を時間的にスライドさせたものが $Kāryahetu$ である。「原因総体 $Hetusāmagrī$ 」および「知覚による確認と否定的確認の操作」は超越論的条件を規定している。解釈学的先行了解の注視がなければ原因群の波束が何処に向って収束するかが決まらないからである。

3-4. [vv. 260-279] $Vastubalapravṛttānumāna$ が作動する場は同時に $Apoḥa$ のネガティブな地平融合の場でもある。その否定的場は $dr̥ṣyānupalabdhi$ が自己認識 ($svasaṁvedana$) であることによって自律性 ($svataḥ$) が与えられている。

3-5. [vv. 280-285] この独立の場を構造存在論の視座から「 $ahetu$ $vināśitvānumāna$ (「自発的消滅性」論証)」として記述する。消滅の原因すら自己に含んだ構造は次第に時間構造をもつ基底構造 P_0 の超越論的規定を可能にする「瞬間的存在性」論証へ展開する。これは $Svabhāva$ に対する超越論的演繹論と見なすべきである。PV. IV は、これを目前にしてとぎれる。

($Pramānaviniścaya$ III への展開は「学術紀要 (高知高専)」17 (1981), 18 (1982. 8) の拙稿を参照されたい。)

(高知工業高等専門学校助教授)